

教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み(昭和57年から58年にかけて)

村上英治

1) 昨年この報告でもふれたように、57年10月には、誠信書房から「心理臨床家——病院臨床の実践——」を、福村出版から「障害重い子どもたち——集団療育の場——」を、刊行することができた。ここ両三年暖めていた構想が、心同じする多くの仲間との協力によって結実することができたのをよろこびたい。

2) 前者はまた、昨年10月第1回大会の開催にまでこぎつけた、日本心理臨床学会の発足と相前後してのことだけに、よけいに感懐深いものがある。この学会の名称自体、既存の日本臨床心理学会との関連でいろいろ論議を重ねた上での決定であったのだが、今その名称にきわめて愛着をもっている。臨床心理というよりも、心理臨床という語感の上に、より実践性を強くよみとることができるからにはほかならない。研究者としての私というより、それ以上に、実践家としてのアイデンティティを確立していきたいと考えるこの頃の私だからでもある。障害臨床の面においてもこれまた同じ立場に立つとってよい。

3) 接近の方法論に関しても、内側からの人間接近といった方向性にいよいよ傾斜している自分を感じとっている。両著に内在する基本的志向性はまさしくそれに支えられているものであるし、日本心理臨床学会と相前後して、昨年7月設立の運びに到った。日本人間性心理学会の理念を大切にしたいと思う気持も、これに根本的に連なるものといってよい。操作される人間としてでなく、実存する人間として、人間存在を根源的に位置づけていきたいとの基本的視点に即してのことである。

4) 具体的な業績としては、その他にあまり顕著なもの残すことができなかった。附属学校長としての職責の多忙の故にそれを合理化するつもりは毛頭ない。しかし先にもふれたように、実践家を標榜しようとする私にとって、この附属学校において、いきいきと青春を謳歌する若い、中学生、高校生との出会い、そしてそのかわりには、思いがけない収穫であった。そこにはまさしく教育現場の中での生徒と教師との直接のかかわりが躍動

する。そのかわりにふれて、私はまた改めて教育実践の意味の重さを実感する。修学旅行・研究旅行・林間学校などの諸行事をとおしての子どもたちとの直接のふれあい、さらに帰国子女学級の問題、入学試験制度の改革などをとおしての新しい附属学校のありかたの模索、いずれも今まで体験し得なかった新しい現場での、私にとっての実践課題である。限りなく発達しつづける子どもたちにこれらの成果を還元できることを企図しながら、現時点において、今その方法論を模索しつつある私である。

5) 附属学校において車椅子の生徒をうけいれ、それを卒業させた。卒業後の社会的処遇についてなお多くの問題は残るものの、障害児教育における交流・統合といった今日的課題に直接つながるものといってよい。昨年12月国連が「障害者の十年」を宣言したことを契機として、この線に沿っての展開を期待するひとりではあるが、この課題に即する今ひとつの課題、早期対応の問題も忘れられてはならない。昨年以來ひきつづいてかなり精神的に検討つづけた、名古屋市早期療育・指導委員会での討議は、この年3月、最終的な報告書を本山市長に提出し、名古屋市における総合通園センターを今年5月発足させる運びにまで到らしめた。この問題の進展の流れに沿ってのひとつの一里塚となり得たものとする。しかもこれをもってこの委員会の活動は終りとなったのではなく、そこでの症例研究を継続審議することをまたその任務とする、常置委員会としてその機能を維持することになったことを私は喜ぶたい。

6) 臨床棟発足以来10数年継続してきた、重度心身障害児に対する母子通所形態による早期集団療育のこれまでの成果を福村出版から世に問うたのは前にもふれたとおりであるが、この第13年目の活動の中では、特に父親参加を主題として積極的に取りくんできた。父親ぐるみの療育活動のむつかしさを今までも経験しつづけているだけに、今回のこれらの成果は、大きな意義をもつものと考えられる。本紀要にもその一端を報告しているが、

本年5月、東海心理学会第32回大会で報告した折の反響をふまえて、今後この方面での一層の検討を深めたいと考える。

7) これらの方向性とは視点を異にするものではあるが、昨年12月、Bears博士を招いての名古屋地区における講演会の成功をも忘れがたい。Bijou博士の流れを汲む行動分析の立場からの精神薄弱児に対する治療効果を追求しようとする熱意は、その講演会に参集した人びとの心を強くうった。この集いに直接の責任をになったものとしての喜びであるが、今年8月、小嶋助教授の努力によって開かれたBronfenbrenner教授のセミナーに参加して、これまた立場は違うものの、私どもの仕事に理解をいただいたひとりとして、今後も色々な面から国際交流の道をも大切にしていこうつもりである。

8) 学生相談領域では、昨年また名古屋大学学生相談

室で主宰した学生を対象とする「自己発見グループ」をふたたび、秋色深い蓼科高原でもち得たことは、改めて印象よみがえるものがある。若いということのすばらしさをこのときしみじみ実感する。そしてまたこの若さにつきあって30数年、京都大学学生懇話室で終始カウンセラーとしての職能を果たし、この4月退官された石井完一郎教授の講演の機会に、司会者としての役割をにないつつ、その真情にうたれた思いを忘れがたい。この1月、広島大学における第16回全国学生相談研究会議の席上でのことである。カウンセリング・マインドをこのときほどきびしくまた感じさせられたこともない。これらをまた契機に、共感的理解の線に沿って、いよいよ人間への内面的接近の意義と方法を模索していきたいと考える。

(昭和58年9月5日)

研究経過報告——昭和57年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では、近年カウンセリング過程で特に手がけてきているフォーカシングを抑うつ神経症青年(男子)に適用した事例を発表することができた(「フォーカシングの事例検討」第1回フォーカシング研究会、京都東山閣、57年7月)。またフォーカシング技法の生みの親であるジェンドリン博士の入門書の翻訳の書評をする機会を得た(ユージン・T・ジェンドリン著、村山正治・都留春夫・村瀬孝雄共訳「フォーカシング」福村出版刊の書評、季刊精神療法第9巻第1号、90—91頁、58年1月)。

2. 心理臨床家の養成、教育・訓練問題について。

まず学部学生段階での実習・演習の一つのモデルとして、筆者の過去20年間の経験を基礎として、単著でテキストを出版することができた(『カウンセリング実習入門』新曜社、57年6月)。本書の基本を貫く考え方は、人間の精神的生命をいかに育み、成長するよう援助するかということである。そのために学部学生段階で最低限身につけるには何をなすべきかを明らかにしたことである。幸い、各方面から好評を得ているようである。

もう一つ特記すべきは、4年前から始めた心理臨床家の集い、そしてこれを承けての心理臨床全国研究集会が、

さらに日本心理臨床学会として発足し(昭和57年3月)、第1回大会が九州大学で開催され成功裡に終了したことである(昭和57年10月)。またこの年度内に役員選挙も行われ、本学の村上英治教授と共に理事に選出され、この学会のかかげた所期の目的を果すべき重責を荷担うこととなった。山積した課題のうち、教育・訓練問題、職能・資格問題、倫理問題、実践研究推進の問題等が当面の緊急課題である。

この学会の特色である症例検討においてコメンテーターの役割をとる経験は、これが公開の場で行われるため、とても貴重な自己研修になる。この年度は、2つの機会を得ることができた(岸田博氏他「来談者中心カウンセリングに於ける基礎的考察」、第1回ヒューマニスティック心理学研究会、京都女子大、57年7月；藤澤敏幸氏「ある思春期強迫神経症患者との6年間」日心臨第1回大会、九大、57年10月)。

3. 臨床青年心理学への接近。過去6年間、共同研究として池田博和助手らとともに取り組んできた。今年は、「青年期治療の内的視点」として、青年期治療に際して各メンバーがどのように考え、かつ取り組んでいるか、治療者の内側を浮き彫りにした(研究紀要第29巻、57年